

〔教育実践の記録〕

生徒と創る道徳授業 ～<いのち>との対峙を通して～

中尾 愛（東京農業大学第一高等学校中等部）

1. はじめに

東京農業大学第一高等学校中等部は、長い歴史をもつ高等学校に併設した中学校として開校した。本報告書は、2015年度、開校10年目という節目において、本校における道徳教育の在り方を再考し実践したものの記録である。

2. 「知耕実学」という理念

本校の教育理念は、「知耕実学（ちこうじつがく）」である。生徒は実際の体験を通し、土を耕すように学びを深める。机上の論理に終始せぬよう、自分自身の手で触れ、感じ、考える過程を大切にしようというものだ。自らの体験を通して考えを深め、自身の在り方を構築していく力を育むことを目指している。道徳も、教室内で完結することなく、学校外に足を運び、さまざまな立場でいのちに向き合う人々の話に耳を傾けたり、実際にいのちに触れたりする学びの場であることが望ましいと考えている。また、道徳に関する学びは、なにも道徳の授業内だけに限定される必要は無い。日常のなかで折に触れて話題にしたり、宿泊研修などの行事内に関連させたりと、それが普段の生活の内側にあるテーマであることの意識付けを図った。このように、<理論>と<実践>の両輪で道徳教育を考えることを目指した。

さらに、教授者である教師も「学ぶ姿勢」に徹しようと心がけた。地球上に存在する生命体の中のヒト科という種であるという点において、教員も生徒も何ら変わるところはない。生徒にこちらが一方的に「教える」のではなく、生徒と共に学ぶ、いやむしろ生徒たちから我々教員が大いに学ぼうではないか、という姿勢を教員全員で確認した。

普段の教科教育では、どうしても教員がある程度まで生徒の反応を予想し、「想定範囲内」の授業を進めがちである。しかし、正答のない道徳教育では、教員自身も自らの頭で考え抜かなければならない。どんなにささやかな生徒のつぶやきをも大切にし、教員自身も大いに立ち止まり、深く考えることが要求される。言い換えれば、一見無駄にしか思えないような遠回りが許される授業、それが道徳だと考えた。

3. テーマの検討

本校の生徒は、生き物や自然に興味・関心を持つ生徒が非常に多いが、日々彼らとの関わりの中で以下のような傾向があるのではないかと考えた。

- ① 生き物に接する際に、ただ可愛がることで満足してしまう。
- ② 食事の際、食べ物を残すことに、罪悪感が見受けられない。
- ③ 自然や生き物の命に支えられた自らの生の在り方に無自覚である。

もちろんこれらは生徒のみが抱える問題ではない。綺麗にパック詰めされて並ぶ鶏肉に命の重みを感じたり、毎朝飲む牛乳がどこでどのように搾られたか、想像を馳せたりすることは大人であっても難しい。このように、日々の生活の中で、他の生命とのつながりを意識することや、多くの生物の命の上に自らの存在を自覚する契機そのものが奪われているように思われる。おそらくその自覚がなくても私たちは生きていけてしまえるだろう。しかし、自己が存在する意味や、他の生命の重みを考えるときに初めて、他の生命体への畏敬の念が生まれるのではないだろうか。子どもの自殺や、いじめに関わる問題も、つまるところ生命への軽視から生まれるのではないだろうか。このような考察から、中学一年次のテーマは<いのち>に決まった。

学習指導要領¹に示されている道徳の内容項目を確認すると、「3-(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。」や「3-(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。」が特に<いのち>というテーマに該当すると考えられる。旧学習指導要領と比較すると(1)と(2)が入れ替わっており、これはつまり全ての学年において、生命尊重の内容が第一に示されるように変更されたということだ。学習指導要領における内容項目の順序が必ずしも優先順位を示しているわけではないが、国にとっても緊急の課題であることに間違いは無い。

4. 実践

ひと言で「いのち」と言っても、その在り方は多様であり、さまざまなアプローチが可能である。可能、と言うよりも、多種多様な価値観や思考を受容する想像力は、学問領域に捕われないしなやかな知性を必要とする。ひとつの課題に対峙して自分なりの解決策や解答を出すためには、あらゆる人やものの立場、現象の背景を考慮しなければならないからだ。そこで、各教科の教員が専門性を活かしたアプローチを生徒と行うことで、生徒が複眼的に<いのち>と向き合えるメニューを用意した。


さらに、先に述べたように、「教員が生徒に教える」のではなく、「教員も生徒から学ぶ」ことを理念のひとつとしたため、毎時間ごとに生徒の反応を見て、教員が議論し、その後の展開を創りだすことができた。教員が「命を大切にしましょう」という分かりきったことを唱えるだけのステレオタイプの講義になることはできるだけ避けたかった。<いのち>という複雑で難解なテーマを、生徒が主体となって考え、表現できる時間にしようと考えた。

¹ 2008年告示のもの。現行の学習指導要領(2015年3月一部改訂)は項目内の順番と細かな表現が変更されているが、本授業時は移行措置期間であったため、前のものに準拠した。

このようなクリエイティブな学びを可能にするために、毎時学年全体で動き、全生徒に同じ体験を保證できるようにした。(具体的な授業展開は、**資料1**を参照。授業の様子は、**資料3**を参照。)

資料1 授業の展開 ※年間の授業のうち、一学期に展開された授業9時限分のもの。

日付	タイトルと授業内容	授業形態
4/17 2限	<p>◆「パック詰めされた卵はあなたにとって命ですか？」</p> <p>遺伝子操作・クローン動物の生産の現状を伝え、生命が人間の手によって作られることが可能になったことを踏まえ、生徒に自分にとってのいのちの枠組みを問う。一人ひとりが折り合いをつけた後に、グループで議論させ、それぞれの考えを共有した。</p> <p>「人の手によって作られたとしても、クローン羊はいのちだと思う。だって他の羊と同じように呼吸をして心臓が動いているのだから」と考える生徒も居れば、「まだ目も頭も体もできてないんだから、鶏の卵の胚は命じゃない」と発表する生徒も居る。私たちはそれぞれが普段から自分の尺度によって<いのち>かそうでないかを線引きしていて、そしてその境界線は一人ひとり微妙に異なるということを見出す。</p>	<p>講義</p> <p>内省</p> <p>議論</p> <p>実験</p>
4/23	<p>◆「農場の動物は、どんな目をしている？」</p> <p>先に挙げた理論的アプローチと並走するように、実践的アプローチに取り組んだ。宿泊研修では、例年にはなかった<農場訪問>を新たに組み入れた。農大富士農場(富士宮市)を訪問し、農場で働く方や実習生の話の聞いたり、家畜として飼育されている動物たちの様子を見つめたりすることは、生徒達の日常から乖離している<いのち>と真正面から向き合う機会になった。見学の際には農場の様子を自由にスケッチさせて、後で改めて<富士農場視察を通して考えたこと>というタイトルで作文を書ってもらった。「私たちが生きていくために、たくさんの生物が犠牲になっていることが分かった」「消費者(自分も含め)は、そのような事実を知っている人は、とても少ないと思います」私たちは、普段頂いているいのちが、どこでどのように生き、手をかけられ、食卓に届けられているかについてあまりに無知であると自覚した。</p>	<p>フィールドワーク</p>
5/9	<p>◆「なぜヒトはヒトの命を奪うのだろうか？」</p> <p>戦争やテロによって失われる命について考える。今や世界中で勃発するテロは、無差別に多くの人々の命を奪い、人類はその負の連鎖を断ち切れずに居る。テロや戦争では人の命がきわめて軽く扱われている現状を見つめ、何故<いのち>がこのように無惨にも奪われて行くのか、グループで</p>	<p>講義</p> <p>議論</p>

	議論の場をもつ。宗教や思想・価値観などの違いにより衝突が止まらないことや、疎外された者や国が孤立し、復讐としてテロを起こす現在の社会の在り方を考えた。	
5/21 5/25	<p>◆「<u>四日目の卵</u>」</p> <p>学校にある保温機で、実際に有精卵を温める。四日後、卵の重さを比較して、明らかに卵が成長していることを実感する。また、複数の卵の様子を検卵機で観察し、卵個体によって成長の過程が異なることを認識する。この授業の後、「胚はいのちだ」と考える生徒が初回の講義時に比べて顕著に増えた。</p> 	講義 内省 議論 実験
6/14 2限	<p>◆<u>ヒトが<生きる>・<死ぬ>ってどういうこと？ 医師経験者から聞く<いのち></u></p> <p>生物の<いのち>、人間の<いのち>と向き合うなかで、そもそも<いのち>や<死>とは何なのか、という声があがった。本校の校長田中越郎は、内科医としての勤務経験がある。日々患者と対峙するなかで、田中はどのような実感を抱いていたのだろう。生徒たちから、「もっと色んな人の立場から<いのち>を聞きたい」という声があがり、この場が実現した。専門である生理学の観点から見る<いのち>から始まった話は、脳死、人間の生の意味、死を迎える自分の気持ちの在り方など多岐にわたり、50分があっという間に過ぎたのだった。</p> <p>生徒が抱いた感想もさまざまで、「たしかにここで息をし、耳をすませていることの幸せを感じることができた」「今まで友だちが他の友だちに『死ぬ』と軽く言っているのを何度も見たことがありました。この時わたしは見ただけで何も言わずにスルーしてしまいました。けれど、今回お話を聞いて今度からはそういうのを見つけたらしっかり注意しようと思いました」などがある一方で、「校長先生は、障害を持った方には感謝すべきだとおっしゃっていましたが、その人の不自由な人生が変わる訳でもなく、かえって健康な私たちに同情されたら不愉快でないかと感じました」という鋭い指摘もあった。</p>	講義 内省
6/21	<p>◆<u><死>を送る。そして迎える。</u></p> <p>これまで、たくさんの具体的な事例を挙げて<いのち>、もしくは<死>について生徒とともに考えてきた。生徒の発言や作文の中で、<いのち>中心に物事を考えるだけではなく、<死>についても言及するものが増えてきたことを受けて、<死>について共に考える講義を開いた。最初に</p>	講義 内省 議論

	<p>それぞれの〈死〉の定義を考えてもらい、発表してもらおう。ここで、講義者自身の考え「死は概念であり、ヒトしか死後や死について想像することは無いのでは？」も発表する。そして、文化圏によって葬法が違うことを紹介しながら、死が人間にとってきわめて意味深いものだとは皆で確認する。</p>	
--	--	--

※2学期以降も〈いのち〉をテーマに展開。2学期・3学期の大まかな授業トピックは資料2を参照。

5. 成果と今後の課題

このように、自分の考えを導き出す時間と、他生徒や教員と共に話し合い意見を共有する時間を等しく重要視したため、自ら考える時間→議論の時間→講義の時間→自ら考える時間……というサイクルが自然と出来上がっていった。教科教育の時間で求められる、時間数に見合った進捗という制限から解放されているため、生徒の躓きを大切にできている。生徒達は、真剣に臆することなく自らの考えを表現し、だからこそ他者の考えに耳を傾けられているのだろう。正答の無い問題に対峙する勇気と、異なる考えをもつ他者と主体的に対話する姿勢を身につけることができているのだと思う。

また、教員が自身の心の葛藤や、〈いのち〉に対する自らの無知をさらけ出したからこそ、考えよう、悩んでみようという誘えたのではないかと。「愚直」な教員達に対して、生徒達も苦戦しながらも言葉を紡ごうとしていた。発表だけで終わらずに、振り返って文章化する時間を必ず設けたため、人前に立って発言することが苦手な生徒の考えも授業に生かされている。

生徒たちのまっすぐな眼差しから何よりも学んだのは教師であろう。我々教員も、日常のささやかな場面に〈いのち〉が溢れていることに改めて気づき、生徒と共に自己の存在意義や他の生命体のかけがえのなさを認識出来た。

今後も〈いのち〉をめぐる我々の葛藤は続く。生徒が主体的に考え、立ち止まり、言葉を重ねるように、教員もますます本を読み、出逢いを重ね、情熱をもって学んで行く必要がある。生徒と共に教員も学ぶ、本稿はそんな本校の道德教育の一報告である。

資料2

2学期以降の主な授業テーマ

- ・ ペットの命（犬猫の殺処分の現状・海外との比較）
- ・ 脳死・安楽死などの問題
- ・ 死刑制度について…

資料3

実際の授業の様子をポスターにしたもの。授業参観時(6月13日～18日)に廊下に掲示し、保護者にも観て頂いた。

道徳の授業ではこんなことを学び、考えています！

テーマ：<いのち>

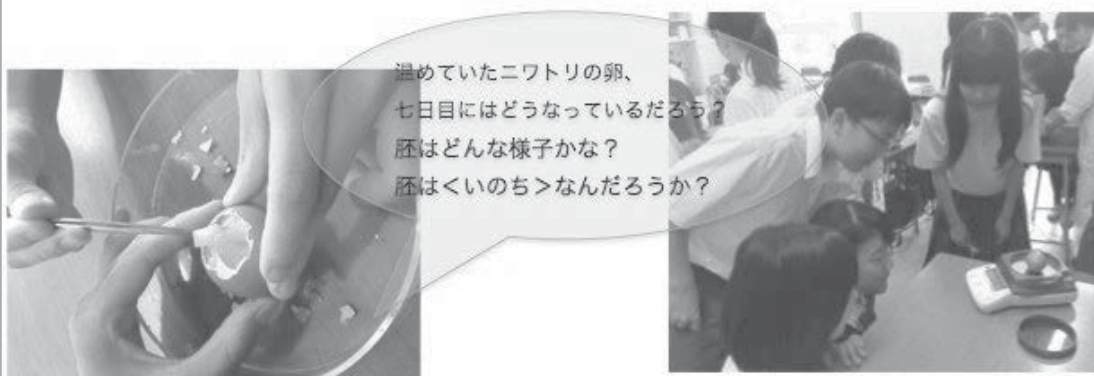
宿泊研修中に訪れた富士農場では、私たちの食を支えている<いのち>の現場を見つめました



【問1】 私たちは普段<いのち>にどのように折り合いを付けているのだろうか？



【問2】 ニワトリの卵は、あなたにとって<いのち>ですか？



来週火曜日は、お医者様として<いのち>
に関わっていた校長先生にお話を伺います！

